

実践報告

看護師のとらえた院内デイケアの効果 ～患者と看護師の反応を通して～

In-patients day care effects identified by nurses : A study based on patients' and nurses' responses

松田 美紀^{1) 2)}, 加藤 真由美³⁾, 谷口 好美³⁾, 正源寺 美穂³⁾

Matsuda Miki^{1) 2)}, Kato Mayumi³⁾, Taniguchi Yoshimi³⁾, Shogenji Miho³⁾

¹⁾ 石川県済生会金沢病院, ²⁾ 金沢大学大学院医薬保健学総合研究科保健学専攻

³⁾ 金沢大学医薬保健研究域保健学系

¹⁾ Ishikawa Saiseikai kanazawa Hospital

²⁾ Division of Health Sciences, Graduate School of Medical Sciences, Kanazawa University

³⁾ Faculty of Health Sciences, Institute of Medical, Pharmaceutical and Health Sciences, Kanazawa University

キーワード

一般病院, 院内デイケア, 高齢患者, 患者看護師関係

Key words

general hospital, inpatient-hospital daycare, older patients, patient-nurse relationships

要 旨

本調査の目的は、院内デイケアの効果を、看護師がとらえた参加患者の反応、院内デイケアへの参加看護師と非参加看護師の反応から明らかにすることである。一年間にA病院で開催された院内デイケアの参加患者185名と、同期間に在籍していた看護師185名を対象とした質問紙による調査を行なった。

院内デイケアの効果として、参加患者の多くに、意欲があり表情が柔らかい様子がみられた、参加看護師は、参加患者と心地よい時間の共有や参加患者の残存機能を再認識でき、その後も積極的なコミュニケーションを図るなどの行動の変化がみられた。非参加看護師では、参加患者の様子を知る機会があれば、参加看護師同様の行動の変化と、次回の院内デイケア参加を促す行動の変化が見られた。

今回の結果を基にした、院内デイケアの参加患者の選定や看護師の参加を促せるような運営、非参加看護師への情報伝達の仕組み作りの必要性が示唆された。

連絡先：松田 美紀

石川県済生会金沢病院

〒920-0353 石川県金沢市赤土町ニ13-6

はじめに

一般病院で認知機能が低下した高齢患者のための院内デイケアが実施されている。一般病院の院内デイケアは、せん妄や認知機能低下をきたした患者を中心に、身体・認知機能の低下予防や情緒面の安定を図ることを、主な目的にした集団ケアとして提供されている。

高齢患者では、認知機能や意欲が入院時より退院時に有意に低下し¹⁾、せん妄などの入院関連機能障害が生じやすく²⁾、在院日数が延長し³⁾、認知症高齢者では、在宅復帰率が低い傾向にある⁴⁾。また、認知症高齢者は、不慣れな環境で混乱し、点滴やチューブ類の抜去、転倒リスクが高く⁵⁾、スタッフステーションで過ごすことが多い現状がある。

一方、看護師側の課題としては、緊急度の高い患者を看護しながら、高齢患者の転倒への注意や関わりに余裕がもてない⁶⁾、認知症高齢者のケアに対して、認知症の人のニーズに沿った十分なケアを行えない⁷⁾などの葛藤が生じている。これら的高齢患者と看護師側の課題を解決するための新たな高齢者ケアの1つとして、院内デイケアを導入する施設が増えている。

院内デイケアの効果として、先行研究では、せん妄症状のある患者を対象とし、週に1回60分、入院中に2回以上院内デイケアに参加した結果、せん妄症状の改善や不穏時や不眠時の薬剤使用の減少がみられた⁸⁾。呼吸器病棟での高齢者集合ケアでは、平日のみ毎日、8時半から17時の時間帯で開催し、他者交流の促進やQOLの向上につながることを明らかにしている⁹⁾。内科で治療を受ける認知症高齢者を対象に行った事例研究では、午前中の2時間、院内デイケアに参加し、活動的で生き生きとした時間を過ごすことで、認知症の行動・心理症状(BPSD: Behavioral and Psychological Symptoms of Dementia)が軽減したとの報告がされている¹⁰⁾。

A病院でも2015年より院内デイケアを月に2回の開催を行っており、参加する患者の意欲的な反応がみられることが多いが、その実態は明らかではない。院内デイケアに参加する患者は、せん妄による意識の混濁や認知機能の低下による言語コミュニケーションの難しさなどから、患者自身からの評価は難しい場合が多い。

また、参加する患者の反応は、看護師によって観察されている場合が多く、看護師のとらえた患者の反応と看護師の反応から院内デイケアの効果

の検証を行うことにした。

目的

本調査の目的は、院内デイケアでの看護師がとらえた患者の反応と、院内デイケアに参加した看護師と非参加の看護師の反応から院内デイケアの効果을明らかにすることである。

用語の操作的定義

院内デイケアは、一般病院に入院し、せん妄や認知機能の低下をきたした患者を中心に、看護師が非薬物療法などを用いて、身体・認知機能の維持や情緒面の安定を図ることを目的に行う集団ケアとした。

調査方法

本調査は、A病院での院内デイケア実施に伴い、看護師のとらえた参加した患者（以後、患者とする）の反応と、院内デイケアに参加した看護師（以後、参加看護師とする）と、非参加の看護師（以後、非参加看護師とする）の反応から、一般病院における院内デイケアの効果を探究するものである。

1. A病院における院内デイケアの運営と実施内容

A病院は、260床の一般病院であり、診療科は17科であり、急性期病床に加え、回復期リハビリ病棟や緩和ケア病棟を有しており、2017年度の平均在院日数は16日である。院内デイケアは、2015年3月から毎月2回14時から15時30分まで、ダイルームの一角で行い、看護部のスタッフにより企画と運営が行われている。参加条件として、意欲や認知機能低下がみられる患者で、開催日の体調をみて、病棟看護師が参加の可否を判断した。患者の情報は院内デイケア参加申し込み用紙に病棟看護師が記載し、院内デイケアの主催者側の看護師との情報共有を図った。

院内デイケアの内容は、患者の緊張をほぐす目的で毎回、軽体操、自己紹介を行った。認知機能低下予防を目的に、非薬物療法（現実見当識訓練、お化粧ケア、音楽療法）を実施し、自尊感情を高める目的で、個人が好む活動（カラオケ、作品づくり、将棋など）、社会性を維持し楽しみを提供する目的で集団での活動や季節のイベント（笑いヨガ、運動会、クリスマス会）などの内容を選択し行った。

2. 調査対象者

2015年3月1日から2016年2月28日の期間に、A病院に入院し、院内デイケアに参加した患者と、この期間中にA病院に在籍し、患者の調査が終了した後に、質問紙に回答可能な看護師全員を対象とした。

3. データ収集方法

1) 患者の反応

患者の調査は、院内デイケア参加申し込み用紙の記載内容を用いて行った。基本属性として、年齢、性別、主疾患、認知症の有無、移動方法、身体抑制の有無、参加回数があり、その他の項目として、院内デイケアの参加理由、参加中と参加後の患者の反応の記載欄を設けた。院内デイケアの参加理由と参加中の反応は参加看護師が記載し、患者の参加後の反応は、院内デイケアの参加後から翌日までの様子を夜勤を担当する看護師が記載を行った。

患者の院内デイケアへの参加理由の項目は、気分転換、意欲低下、せん妄、夜間不眠、点滴類の自己抜去の中から該当する項目を選択し回答した。参加中の様子は、アクティビティケア評価基準¹¹⁾を参考に作成し、意欲あり、意欲なし、表情が柔らかい、表情が硬いから該当する項目を複数回答とした。参加後の反応は、院内デイケアへの参加後から翌日までの様子として、夜間の入眠、興奮、せん妄の有無に関する選択欄を設けた。そのほか、選択欄以外の参加理由や参加中の反応を看護師が記述するための自由記載欄を設けた。

2) 院内デイケアへの参加看護師と非参加看護師の概要、院内デイケアに対する理解

看護師の調査は、研究者が作成した自己記入式質問紙（以後、質問紙とする）を用い、各部署の管理者に研究の趣旨を紙面と口頭で説明した。管理者により質問紙の配布が行われ、回収は各部署に設置した封筒を使用し留め置き法にて行った。

質問紙の内容は、看護師の基本属性として、年齢、性別、看護師経験年数、院内デイケアに参加の有無、院内デイケアの理解と開催の必要性と協力に関しての設問を設けた。

3) 参加看護師の参加中と参加後の反応

参加看護師の参加中の反応は、質問紙では看護師が感じた効果として用語を置き換え設問した。看護師が感じた効果については、アクティビティケアがケア提供者にもたらす効果¹²⁾を参考に「個別ケアに焦点が当てられる」「個別な情報が得られた」「潜在能力を再認識できた」「ケア時ともに楽しく心地よい時間が共有できた」「特になし」

から複数回答での選択を依頼した。

本調査時に、一般病院の院内デイケアがケア提供者側にもたらす効果を示す指標はなく、今回の調査内容が反映されている、高齢者へのアクティビティケアが提供者にもたらす効果を指標として用いることにした。

参加看護師の参加後の反応は、質問紙では看護師自身の行動の変化として用語を置き換え設問した。院内デイケアへ参加後の看護師自身の行動の変化の有無を選択し、行動の変化の内容を自由記載とした。

4) 非参加看護師の中で患者の様子を知る機会があった看護師の反応

患者の様子を知る機会とは、参加した看護師との会話や、看護記録、院内デイケアで制作し持ち帰った作品などから、院内デイケアに参加した患者の様子を知る機会（以後、患者の様子を知る機会とする）を意味する。

非参加看護師の反応は、質問紙では院内デイケアに参加する患者の様子を知る機会があった看護師自身の行動の変化として用語を置き換え設問し、看護師の行動変化の有無と、行動の変化の内容を自由記載とした。

4. 分析方法

1) 患者の分析

基本属性、移動方法、身体抑制、参加回数、参加理由ごとの参加中、参加後の反応の単純集計を行った。院内デイケアでの看護師が捉えた患者の反応を明らかにする目的で、自由記載欄の記述は、KH Coder¹³⁾を使用し、単語頻度解析、抽出語とその関連性を共起ネットワークにて分析した。共起ネットワークは、出現パターンの似通った語、共起の程度が強い語を線で結んだネットワークであり、強い共起関係ほど太い線で描画され、出現数が多い語は大きな円として描画される。抽出語が比較的強くお互いに結びついている部分を自動的に検出してグループ分けを行い、その結果を色分けによって示すサブグラフ検出を用い、グループ化した。同じサブグループであれば実線で結ばれ、異なるサブグループであれば破線で結ばれる。

2) 参加看護師と非参加看護師の分析

参加看護師と非参加看護師に分け、基本属性と院内デイケアに対する理解と院内デイケアの開催の必要性に対して単純集計した。看護師自身の行動の変化の有無と行動の変化に関する記述内容は類似した内容をまとめて単純集計した。

5. 倫理的配慮

A病院倫理審査委員会の承認を得て実施した。患者には、A病院の個人情報保護の指針に準じて説明、本人が同意の記載が行えない場合は、親族もしくは代理人に同意を紙面で得た。看護師の調査は、個人が特定されないよう無記名とし、質問紙の提出により研究参加の同意が得られたことを確認した。

結 果

1. 患者の調査

1) 院内デイケアの患者の概要 (表1)

患者は、185名であり、男性39名 (21.1%)、女性146名 (78.9%)、年齢は、 82 ± 8.0 歳で、75歳以上が157名 (84.9%) を占めた。主疾患名では運

表1 院内デイケアの参加患者の概要 N=185

項 目	項目	人数 (%)
性別	男性	39 (21.1)
	女性	146 (78.9)
年齢	65歳未満	5 (2.7)
	65歳以上 75歳未満	23 (12.4)
	75歳以上	157 (84.9)
主疾患	運動器疾患	48 (25.9)
	消化器疾患	30 (16.2)
	呼吸器疾患	29 (15.7)
	悪性新生物	23 (12.4)
	腎代謝疾患	17 (9.2)
	循環器疾患	13 (7.0)
	その他	26 (14.1)
	認知症 診断名	あり
	アルツハイマー型認知症	20 (25.0)
	脳血管性認知症	9 (11.2)
	レビー小体型認知症	2 (2.5)
	病名不明	49 (61.3)
	なし	105 (56.8)
移動方法	自立	20 (10.8)
	補助具有	13 (7.0)
	車椅子	144 (77.8)
	ベッド	8 (4.3)
身体抑制	あり	74 (40.0)
	センサーマット	38 (53.5)
	ベッド 4点柵	21 (28.4)
	拘束ベルト	3 (4.1)
	抑制 (紐・体幹)	1 (1.1)
	つながり服	2 (2.7)
	詳細不明	8 (10.8)
	なし	111 (60.0)
デイケア参加回数	1回	160 (86.5)
	2回以上	25 (13.5)

動器疾患48名 (25.9%) であった。認知症ありは80名 (43.2%)、移動方法は車椅子が144名 (77.8%) であり、身体拘束ありは74名 (40.0%) であった。院内デイケアに1回の参加は160名 (86.5%) であった。

2) 院内デイケアへ患者の参加理由、参加理由ごとの参加中と参加後の反応 (表2、図1)

患者の参加理由は、気分転換70名 (37.8%) が多く、参加中の反応として表情が柔らかい25名 (35.7%) が多く、次に意欲がある11名 (15.7%) であった。意欲低下がみられた40名 (21.6%) の患者では、参加中16名 (40.0%) に意欲がある様子がみられた。せん妄のある18名 (9.7%) の患者では5名 (27.8%) が夜間入眠でき、夜間不眠のある16名 (8.6%) の患者では、10名 (62.5%) が夜間入眠できた。点滴自己抜去のある8名 (4.3%) の患者では、記載のあった7名は、院内デイケアに参加中は点滴の抜去なく過ごし、徘徊のある3名 (1.6%) の患者では記載のあった1名は徘徊なく参加を行った。いずれの参加理由であっても、患者全体の55名 (29.7%) は夜間の入眠が図られた。

参加中の反応の記述に関しては、KH Coderにより総抽出語730語 (単語358) であり、抽出語で多かったのは、参加が12語、作業10語、話す10語であった。共起ネットワークでは4つのグループに分類され、作品作りを通じて話す、楽しい表情で作業を行い、体操や作業に参加し意欲や笑顔がみられ、カラオケを積極的に歌う様子、笑いヨガを行う様子が記述された。

2. 参加看護師と非参加看護師の調査

質問紙の配布を197名に行い、回収は185名 (回収率93.9%) であった。

1) 院内デイケアへ参加看護師と非参加看護師の概要 (表3)

参加看護師は46名 (24.9%)、30歳代15名 (32.6%)、経験年数10年以上が22名 (47.8%) であった。非参加看護師は、139名 (75.1%) で、30歳代50名 (36.0%)、経験年数10年以上89名 (64.0%) であった。

2) 参加看護師と非参加看護師の院内デイケアに対する理解 (表3)

参加看護師は、院内デイケアを33名 (71.7%) が必要であるとし、協力については、協力したい16名 (48.5%)、業務上困難17名 (51.5%) と回答した。非参加看護師では、院内デイケア開催は、必要である77名 (55.4%) のうち、協力については業務上困難が54名 (70.1%) であった。院内デ

表2 院内デイケアに参加した患者の参加理由、参加理由ごとの参加中と参加後の反応

N=185

		項 目			
参加理由	人数 (%)	参加中の反応 ¹⁾	人数 (%)	参加後の反応	人数 (%)
気分転換	70 (37.8)	意欲あり	11 (15.7)	夜間入眠あり	22 (31.4)
		意欲なし	0 (0.0)	せん妄	1 (1.4)
		表情柔らかい	25 (35.7)	記載なし	47 (67.1)
		表情硬い	3 (4.3)		
		記載なし	37 (52.9)		
意欲低下	40 (21.6)	意欲あり	16 (40.0)	夜間入眠あり	11 (27.5)
		意欲なし	0 (0.0)	興奮	1 (2.5)
		表情柔らかい	18 (45.0)	記載なし	28 (70.0)
		表情硬い	2 (5.0)		
		記載なし	7 (17.5)		
せん妄	18 (9.7)	意欲あり	9 (50.0)	夜間入眠あり	5 (27.8)
		意欲なし	0 (0.0)	記載なし	13 (72.2)
		表情柔らかい	6 (33.3)		
		表情硬い	2 (11.1)		
		記載なし	5 (27.8)		
夜間不眠	16 (8.6)	意欲あり	4 (25.0)	夜間入眠あり	10 (62.5)
		意欲なし	0 (0.0)	興奮	1 (6.3)
		表情柔らかい	8 (50.0)	記載なし	5 (31.3)
		表情硬い	1 (6.3)		
		記載なし	4 (25.0)		
点滴自己抜去	8 (4.3)	意欲あり	5 (62.5)	夜間入眠あり	6 (75.0)
		意欲なし	0 (0.0)	記載なし	2 (25.0)
		表情柔らかい	3 (37.5)		
		表情硬い	1 (11.1)		
		記載なし	1 (11.1)		
徘徊	3 (1.6)	意欲あり	1 (33.3)	夜間入眠あり	1 (33.3)
		意欲なし	0 (0.0)	記載なし	2 (66.7)
		表情柔らかい	0 (0.0)		
		表情硬い	0 (0.0)		
		記載なし	2 (66.7)		
その他	2 (1.0)	意欲あり	2 (100.0)		

参加理由記載なし 28

1) 意欲あり、表情柔らかいのみ複数回答

イケアの開催に関しては、どちらともいえない、必要ないと56名(40.3%)が回答し、協力については業務上困難が43名(76.8%)であった。

3) 参加看護師の院内デイケア中に感じた効果と参加後に生じた看護師の反応(表4)

参加看護師の30名(65.2%)が、参加中に、ケア時ともに楽しく心地よい時間が共有でき、20名(43.5%)が患者の残存能力を再認識した。その中で、参加後に18名(39.1%)に行動の変化がみられた。看護師の反応として、「患者と積極的にコミュニケーションを図る」「患者が興味のある

ことを病棟で促す」「患者の院内デイケアの様子を家族と共有」「患者に対する自身の関わりを振り返る」があった。

4) 非参加看護師の中で患者の様子を知る機会の有無、患者の様子を知る機会のあった看護師の反応(表5)

非参加看護師では、院内デイケアの様子を知る機会があった71名(51.0%)のうち24名(33.8%)に行動の変化があった。非参加看護師の反応には「次回の院内デイケアに患者の参加を促す」があった。

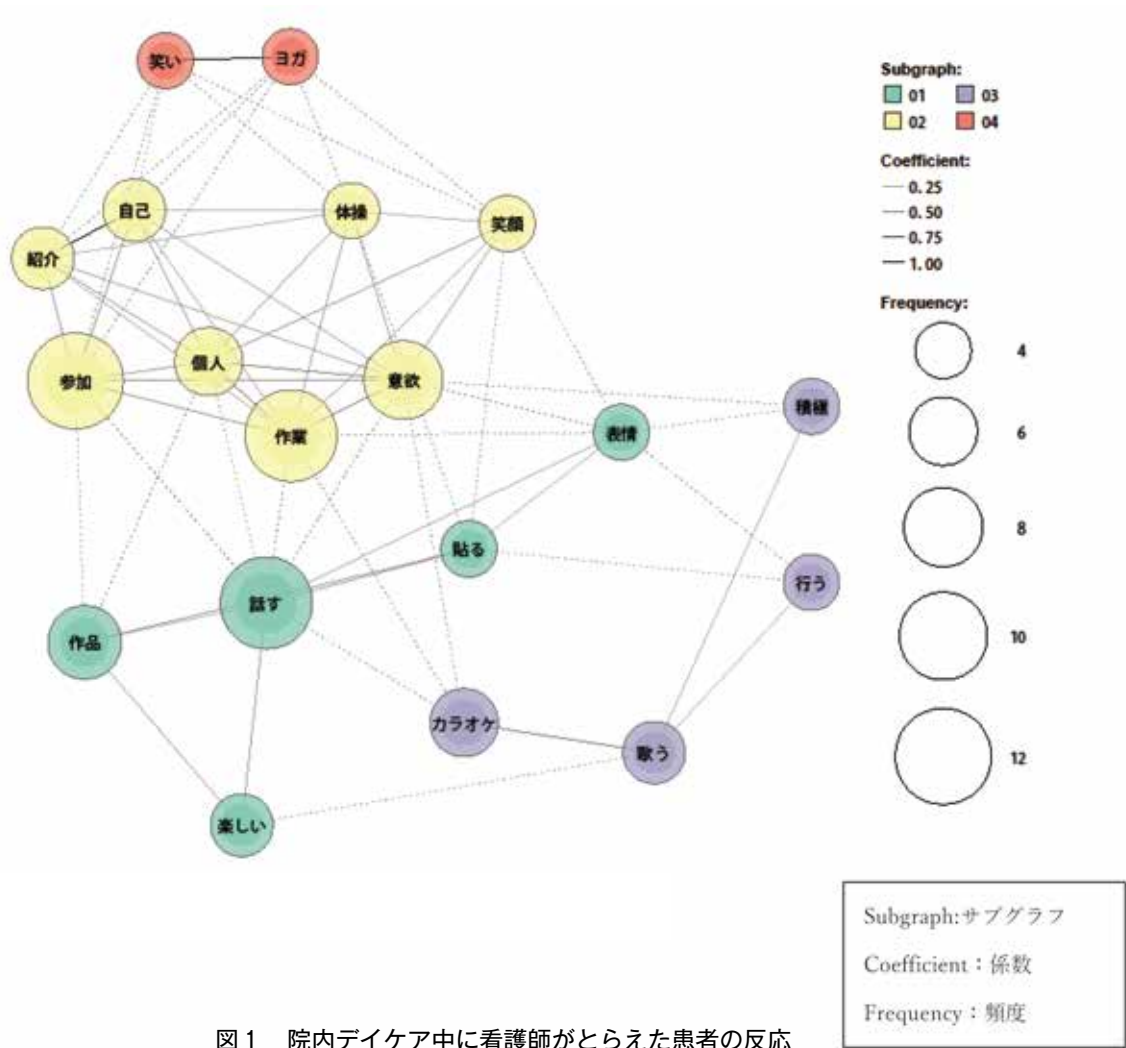


図1 院内デイケア中に看護師がとらえた患者の反応

考察

1. 看護師のとらえた患者の反応

患者の多くは75歳以上であり、認知症の有無にかかわらず、4割が身体抑制を実施されていた。年齢相応の認知機能の低下や、身体不調から現状認識が充分でないなど、治療の協力や理解が難しく、止むを得ず身体抑制が施行されていた背景が予測された。病室では点滴の自己抜去や、徘徊がみられる患者であっても、院内デイケアに参加中は点滴の抜去や、徘徊なく参加が可能であったことから、院内デイケアへの参加は短時間でも身体抑制を解除することにつながり、一般病院での高齢者ケアとして活用が可能であると考えられる。

院内デイケアへの参加理由のうち気分転換が約4割を占めた。不慣れな環境に加え、主疾患からの苦痛や、高齢者では身体機能の低下などによりうつ状態に陥りやすく¹⁴⁾、入院が長期に及ぶと抑うつ度が高くなる¹⁵⁾とされている。看護師は、このような治療を受ける高齢者の心理状態に配慮し、

参加を促していると考えられる。患者の4割が、意欲があり、表情が柔らかい状態で過ごせたことは、院内デイケアへの参加が、快刺激となり、気分転換につながったのではないかと考える。

意欲低下がある患者のうち、4割の患者に意欲がある様子がみられた。高齢者の入院は、変化と社会的刺激の減少により、意欲低下や低活動状態に陥りやすいが、臨床では重要視されないことも多い。また、入院中の認知症高齢者の3割に、意欲低下をみとめるが、積極的な働きかけが少なく、ADLの低下や認知症症状が悪化する¹⁶⁾。院内デイケアの参加は、患者にとって、積極的な行動の促しや肯定的な情動反応を引き出す機会となり、意欲低下予防が行える可能性が示唆された。

先行研究では、院内デイケアに参加する患者はせん妄やBPSDの出現がみられる患者であったが⁸⁾¹⁰⁾、本調査では、院内デイケアへの参加理由が、気分転換や意欲低下のある患者が大半を占めた。A病院は月に2回の開催であり、せん妄やBPSD

表3 院内デイケアへ参加看護師と非参加看護師の概要、院内デイケアに対する理解

N=185

項 目		人数 (%)		
院内デイケア参加		参 加 46 (24.9)	非参加 139 (75.1)	
資格	正看護師	46 (100.0)	132 (95.0)	
	准看護師	0 (0.0)	7 (5.0)	
性別	男性	2 (4.3)	3 (2.3)	
	女性	44 (95.7)	136 (97.8)	
年齢 (歳)	20代	10 (21.7)	18 (12.9)	
	30代	15 (32.6)	50 (36.0)	
	40代	11 (23.9)	47 (33.8)	
	50代	9 (19.6)	18 (12.9)	
	60代	0 (0.0)	6 (4.3)	
	記載なし	1 (2.2)	0 (0.0)	
看護師経験年数	3年未満	4 (8.7)	22 (15.8)	
	3～5年未満	8 (17.4)	7 (5.0)	
	5～10年未満	10 (21.7)	21 (15.1)	
	10年以上	22 (47.8)	89 (64.0)	
	記載なし	2 (4.3)	0 (0.0)	
院内デイケアに対する理解	知っている	46 (100.0)	133 (95.7)	
	知らない	0 (0.0)	6 (4.3)	
院内デイケアの開催	必要である	33 (71.7)	77 (55.4)	
	院内デイケアへの協力	協力したい 業務上困難 思わない	16 (48.5) 17 (51.5) 0 (0.0)	20 (26.0) 54 (70.1) 3 (3.9)
	どちらともいえない、必要ない	13 (28.3)	56 (40.3)	
	院内デイケアへの協力	協力したい 業務上困難 思わない	3 (23.1) 9 (69.2) 1 (7.7)	7 (12.5) 43 (76.8) 6 (10.7)
	記載なし	0 (0.0)	6 (4.3)	

表4 参加看護師の院内デイケア中に感じた効果と参加後の看護師の反応

N=46

項 目	人数 (%)
院内デイケア中に看護師が感じた効果 ¹⁾	
ケア時ともに楽しく心地よい時間が共有できた	30 (65.2)
潜在能力を再認識できた	20 (43.5)
個別な情報(生活史など)が得られた	5 (10.9)
個別ケアに焦点が当てられる	2 (4.3)
特になし	1 (2.1)
参加後の看護師の反応 ²⁾	
あり	18 (39.1)
患者と積極的にコミュニケーションを図る	17 (94.4)
患者が興味のあることを病棟で促す	7 (38.9)
患者に対する自身の関わりを振り返る	3 (16.7)
患者の院内デイケアでの様子を家族と共有	2 (11.1)
なし	28 (60.9)

1) 2) 複数回答

表5 非参加看護師の中で参加患者の様子を知る機会があった看護師の反応 N=71

項	目	人数 (%)
看護師自身の反応	あり	24 (33.8)
	患者と積極的にコミュニケーションを図る	18 (75.0)
	患者が興味のあることを病棟で促す	3 (12.5)
	患者の院内デイケアでの様子を家族と共有	2 (8.3)
	次回の院内デイケアに患者の参加を促す	1 (4.2)
なし		47 (66.2)

のある患者がタイムリーに利用することが難しい現状があるのではないかと考える。高齢者の抑うつや認知症高齢者では意欲低下を見過ごさず、院内デイケアへの参加を促すなどの働きかけと共に現状に即したデイケアの運営の検討が必要である。

参加理由の中で、点滴自己抜去、徘徊、せん妄や夜間不眠のある患者がいた。これらの患者でも、参加中は落ち着いて過ごすことができ、夜間の睡眠を促すことが可能であった。

今回の調査では、院内デイケアの内容として、カラオケや作品づくりなどの作業や体操などを行うことで、患者の笑顔や話し歌う様子や意欲や積極性などの反応がみられた。鈴木ら¹⁰⁾は、院内デイケアに参加する患者が、数時間であってもよい時間が継続されることで夜間の入眠が促される可能性を示唆しており、院内デイケアの内容の充実を図り、睡眠覚醒リズムを整える支援として、院内デイケアを活用できるのではないかと考える。

2. 参加看護師の院内デイケアに対する理解と反応

参加看護師では、院内デイケアで患者の様々な表情や残存機能を知る機会となり、5割が「ケア時ともに楽しく心地よい時間が共有できた」と回答していた。患者の反応を通じて、患者への理解が深まり、肯定的な感情につながったと考えられる。

その中で、4割の参加看護師に「患者と積極的にコミュニケーションを図る」などの看護師の反応がみられ、「患者に対する自身の関わりを振り返る」は参加看護師のみに生じていた変化であった。認知症看護の質向上に取り組み続ける看護師は、患者の変化や自身の成長から活動の意義を実感して、よりよい認知症看護を実践できるように考えて行動することが明らかとなっている¹⁷⁾。院内デイケアで直接患者の反応を見ることで、積極的な関わりを行うことや患者に接する際の自身の姿勢を見直す機会につながったのではないかと考える。

参加看護師の方が、非参加看護師に比べ、開催を必要であると理解し、院内デイケアへ協力したいと回答していた。この結果は、院内デイケアへの患者の効果を実感している看護師の思いが反映されていると考える。

参加看護師の6割は、その後の行動に変化がみられなかった。この中には、院内デイケアに患者と共に参加するなど、日頃から高齢者のケアに関心が高く、患者の対応に十分な配慮を行っている看護師や院内デイケアへの参加を業務の一貫として参加している看護師などが混在していることが考えられる。様々な看護師の存在を認識しながら院内デイケアの効果的な運営を行う必要がある。

3. 非参加看護師の院内デイケアに対する理解と患者の様子を知る機会があった看護師の反応

非参加看護師の中でも院内デイケアの開催はほぼ周知されていた。非参加看護師は、院内デイケアの開催を、必要ない、どちらともいえないと4割が回答しているが、院内デイケアへの協力に対しては、協力したいと業務上困難が8割を占めている。このことから、機会があれば院内デイケアへの参加の意思があることが伺えるため、参加が行えるような調整を行う必要がある。

非参加看護師のうち、患者の様子を知る機会があった看護師は、「患者と積極的にコミュニケーションを図る」「患者が興味のあることを病棟で促す」「患者の院内デイケアの様子を家族と共有」など、参加看護師と同様の行動の変化がみられた。非参加看護師であっても「次回の院内デイケアに患者の参加を促す」行動にもつながることから、各病棟へ院内デイケア時の患者の反応などを積極的に情報伝達できるような取り組みの必要性が示唆された。

4. A病院における院内デイケアの効果と課題
患者の院内デイケアへの参加は、1回が9割近くを占めた。一般病院の平均在院日数は16日となっており、様々な疾患や治療過程の中、頻回な参加は難しいことが予想される。患者の選定を行う

際に、高齢患者の意欲維持や、夜間の睡眠を促す、身体抑制解除などの効果を視野にいれる必要がある。

院内デイケアは参加看護師にとって、患者の生活機能や意欲的な一面を見る機会となっていた。非参加看護師であっても、院内デイケア参加中の様子を知る機会があれば、その後の行動の変化につながる事が分かった。

入院治療の場で、看護師が、疾患や業務だけでなく、患者その人や生活に関心が払われている場合、看護師と患者間でプラスの相互作用が起こり、患者が安心して過ごせる環境をつくりだせる¹⁸⁾ことが明らかとなっている。看護師が、入院する高齢患者の生活を視る場として、今後も、院内デイケアを活用する必要がある。

今回の調査では、院内デイケアに参加する患者の反応を看護師の視点で評価を行った。院内デイケアに参加する患者自身の視点での効果の検討は不十分であり、今後の検証が必要である。

結 論

一般病院における院内デイケアの効果として、看護師がとらえた患者の反応として、気分転換や意欲の低下がみられる患者では、参加中に意欲があり、表情が柔らかい様子がみられた。院内デイケアは、入院する高齢患者にとって気分転換が図られ、意欲低下を予防することが可能であることが示唆された。

参加看護師では、患者と心地よい時間の共有や患者の残存機能を再認識でき、その後も積極的にコミュニケーションを図るなどの行動の変化がみられ、院内デイケアの開催を必要であると理解していた。非参加看護師では、院内デイケアの患者の様子を知る機会があれば、参加看護師同様の反応がみられ、次回の院内デイケア参加を促していた。

参加看護師、非参加看護師共に、院内デイケアへの協力について、業務上困難としているが、積極的な看護師の参加を促せるような運営や、非参加看護師であっても、院内デイケアに参加中の患者の反応を知るための情報共有の必要性が示唆された。

研究の限界

本研究は、一施設の院内デイケアの調査であり、一般化することは難しい。患者の反応は、複数の看護師の観察によるものであり、観察の視点に偏

りが生じている可能性がある。今後は、患者の反応を、本人の視点で検証することや、統一した観察者の視点で院内デイケアの効果を検証する必要がある。

利益相反

本調査における利益相反はない。

文 献

- 1) 相川みづ江, 泉キヨ子, 正源寺美穂: 一般病院に入院中の高齢患者における生活機能の変化に影響する要因, 老年看護学, 16(2), 47-56, 2012
- 2) 大蔵暢: 「老年症候群」の診察室: 超高齢社会を生きる, 朝日新聞出版, 東京, 185-190, 2013
- 3) 厚生労働省: 医療提供体制を取り巻く現状等について, [オンライン, <https://www.mhlw.go.jp/content/12404000/000493996.pdf>], 厚生労働省, 8. 17. 2019
- 4) 中央社会保険医療協議会: 入院医療, 身体疾患のために入院する認知症患者のケアについて, [オンライン, <http://www.mhlw.go.jp/file/05-Shingikai-12404000-Hokenkyoku-lryouka/0000105049.pdf>], 厚生労働省, 4. 15. 2019
- 5) 古田光: 一般病床高齢者入院患者における認知症実態調査の試み-総合病院精神医学会認知症委員会多施設共同研究-, 総合病院精神医学, 27(2), 100-106, 2015
- 6) 山本美輪: 一般病棟勤務看護者の高齢者看護におけるジレンマの概要, 日本看護管理学会誌, 11(2), 84-91, 2008
- 7) 小山尚美, 流石ゆり子, 渡邊裕子, 他: 一般病棟で集中的な医療を要する認知症高齢者のケアにおける看護師の困難, 大規模病院(一施設)の看護師へのインタビューから, 日本認知症ケア学会誌, 12(2), 408-418, 2013
- 8) 大久保和美, 徳山まどか, 大西友佑子, 他: せん妄予防対策チームで関わる院内デイケアの効果, 市立豊中病院医学雑誌, 13, 15-19, 2013
- 9) 吉村浩美, 鈴木みずえ, 高木智美, 他: 急性期病院におけるPerson-centred Careをめざした高齢者集団ケアの取り組み, 認知症ケアマッピング(DCM)の導入と展開, 看護研究, 46(7), 713-722, 2013
- 10) 鈴木みずえ, 加藤滋代, 櫻木千恵子, 他: 急性期病院で内科治療を受ける認知症高齢者に対する院内デイケアの援助: 認知症ケアマッピン

- グ (DCM) を用いた分析, 認知症ケア事例ジャーナル, 6 (4), 381-390, 2014
- 11) 青柳暁子, 西田真寿美: 認知症高齢者のアクティビティケアに対する看護職・介護職の評価基準の類型化, 日本老年医学会雑誌, 51(3), 264-270, 2014
 - 12) 六角僚子: アクティビティという視点をもつケアの有効性, 老年看護学, 6 (1), 114-121, 2001
 - 13) 樋口耕一: 社会調査のための計量テキスト分析, 内容分析の継承と発展を目指して, ナカニシヤ出版, 157-160, 2018
 - 14) 井本晶太, 飯田有輝, 山田崇史, 他: 高齢心不全患者における入院期間の関連因子, 心臓リハビリテーション, 24(2), 130-135, 2018
 - 15) 上野範子, 藤田峯子, 中村弥生, 他: 自己評価式抑うつ尺度 (SDS) を用いた高齢者の精神的健康状態の調査, 入院高齢者と在宅高齢者の比較, 日本公衆衛生雑誌, 44(11), 865-873, 1997
 - 16) 山下真理子, 小林敏子, 藤本直規, 他: 一般病院における認知症高齢者のBPSDとその対応, 一般病院における現状と課題, 老年精神医学雑誌, 17(1), 75-85, 2006
 - 17) 中筋美子: 認知症看護の質向上に取り組み続ける看護師の意識の変遷, 高齢者のケアと行動科学, 23, 35-45, 2018
 - 18) 早川ゆかり, 小島通代: 患者の入院生活に看護が及ぼす影響, 日本看護科学会誌, 35, 176-183, 2015